# 年の瀬の古法眼

「土曜寸言」031122

**「古法眼出どころあはれ年の暮」（芭蕉）**

ここに「古法眼（こほうげん）」とは、室町末期の画家狩野正信の子元信のこと。宋・元・明などの中国様式に大和絵の技法を取り入れ、桃山時代の障壁画の技法を確立した名人。

一句は、元信の絵が歳の市に売り出されたという。もとよりこのような絵を所蔵している人はただ者ではない。それを売りに出したということは、この人、余程生活に困っているに違いない、というのである。

早いもので、今年も間もなく師走。株価が一年ぶりに一万円を超えたというので、政府は、鬼の首でも取ったように景気回復を喧伝して見せる。だが、庶民の感覚とは程遠い。それどころか、地方においては不況の深化をこそ実感しているのである。

現に、ここ山梨県では、今年年初から六月までの半年間の経済指標をみると、倒産件数は六十九件、その負債総額は千四百五十四億円。これを昨年同期と比較してみると、件数で四十七％、負債総額で五十％の増加である。失業率などには一服感があるものの、低賃金のパート労働が主なもので、有効求人倍率は相変わらず一・〇をはるかに下回っているのである。

不況の深化の中で、景気が良いのは警察だけだ。刑法犯罪の認知件数は、ここ数年年率十％の成長率、近いうちに県内で二万件に迫る勢い。当然ながらその分検挙率は低下する。そこで、**「盗人に逢うた夜もあり年の暮れ」（芭蕉）**。

それにしても、好んで犯罪に手を染める人はいない。已むにやまれぬ仕儀が、犯罪となったのであろう。時代が、強者の論理で語られ、経営に失敗した指導層が、自らの無能を省みることも無くリストラという形で弱者を排除する。排除された者は、自殺するか、暗中に模索してもなお答を発見できない。そうなれば、**「分別の底たたきけり年の昏（くれ）」（芭蕉）**となる。

泣きっ面に蜂。悪いときには悪いことが重なるもので、今年は十年ぶりの冷害に見舞われた。構造改革を声高に叫ぶ小泉内閣も、諦めてしまったのか農業や林業のことは黙して語らない。

川上、川下と分ければ、この時代川下側に利益の構造が偏在している。だから、農業や林業を第一次産業と呼んで上流に押し込めておく限り、再生の道は程遠い。

幸い、山梨県では、農林業と商工業とを同一次元平面に置いてみて、そこでどんな政策が可能か検討を始めた。来年には、何か効果があらわれるかもしれない。そこで、新年に期待して、**「我富めり新年古き米五升」（芭蕉）**。